みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

人間はなぜ肉食を行うのかを考える：共同研究：肉食行為の研究 （2012-2014）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5576

PROJECT

人間はなぜ肉食を行うのかを考える

文・写真
野林厚志

共同研究 ● 肉食行為の研究（2012-2014）

はじめに

「肉食行為の研究」。かくも短く直接的な題目の課題名をもつ共同研究の目的は以下の 3 点にまとめることができる。

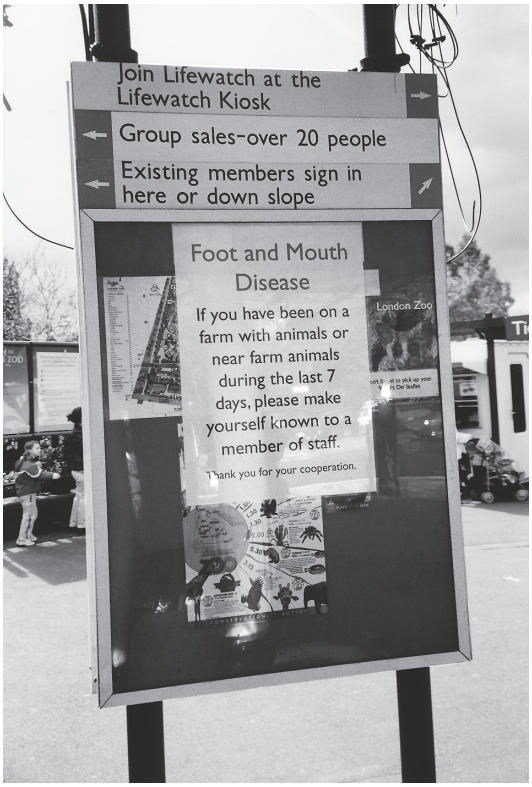
1. 人類社会において肉食が果たしてきた役割や機能を文化的、生態学的視点を中心に検証する。
2. グローバル社会において変質していく肉食の役割や機能を考察し、その将来を予見するための議論を行う。
3. 1、2 をふまえながら、動物と人間との関係、さらには動物を介在させた人間の社会関係を考えるための新たな視座を提供する。

本稿の執筆時には最初の研究会合を開催していないので、今回は本共同研究のねらいや着想にいたった経緯、問題意識について概略を述べておきたい。

社会関係を映しだす肉食

民博で共同研究会を開催するためには、書面とヒアリングによる審査に通らなければならない。ヒアリングの質疑で明確にしたのは、この研究会が食文化や生態人類学で行われてきた研究をふまえたうえで、社会関係としての肉食行為を考えるということであった。

人間にとって動物は、食──被食の関係だけでなく、役畜、ペットもしくは伴侶動物、表象の対象として生活の中に深くはいりこんできた。そして、人間は動物に対して、その関係性に応じて様々な態度をとり、これらの態度のありかたは人間同士の関係にまで影響を及ぼすことが少なくない。とりわけ、肉食をめぐる人間の態度は、生命観に関わる本質的な問題にもつながり、個人の衝突にとどまらず集団間の紛争にまで発展しうる。こうしたことから、肉食行為は人類学ならびに歴史学や考古学といったその関連諸分野において、人間の社会の様子を映しだすものとして少なからぬ関心をよんできた。たとえば、馬淵東一は、台湾原住民族のブヌン族の食肉の分配や共食のありかたから、それらが社会関係を反映させているだけでなく、それらの慣行が社会的紐帯を再確認、強化させていることを論じ（馬淵 1940）、リー・リチャードは、クンブッシュマンの食生活において植物性食品がカロリーやタンパク質の摂取に大きく寄与していることを実証的に示し、食肉のために獲物を追い求め続ける狩猟採集民の生業行動のイメージを大きく変えた（Lee 1968）。この他にも先史考古学における肉食行動の復原の方法論（Binford 1981）、文化的、歴史的脈絡からの肉食観の研究（シムーンズ・フレデリック 1994）等、肉食行為を切口にして人類社会を理解しようとしてきた研究者は少なくない。肉食行為は必須アミノ酸を効率的に獲得するための適応行動であるといった生態学的、栄養学的説明はもちろん可能ではあるが、それ以上に、社会関係を非常に雄弁に語ってきたのである。



2000 年にイギリスで口蹄疫が猖獗した際、ロンドン動物園で観覧者に出されたメッセージ。近縁の野生種や動物園の動物たちも感染症の危険にさらされる。人間が媒介することもおおいにある（2000 年、イギリス）。

肉食行為の変質

筆者自身は人間と動物との関係に着目した人類学の調査を台湾や大陸中国で行ってきた。地域社会における動物利用を社会関係の脈絡や文化的、歴史的背景の中でとらえたいと考えてきたからである。しかしながら、調査で目の当たりにした現実は、動物の社会的な位置づけが刻々と変化し、先行研究で描きだされていた人間と動物との関係は過去の残像にさえなろうとしていることであった。これは、我々の日常の消費生活からも自覚できることだろう。肉にありつくためには、自ら狩猟や家畜飼養を行う必要があった時代から、現金によって他者が生産した食肉を購入する時代になり、他の商品と食肉との間には、現金で購入するという経済的な同列関係が生じている。食肉は野菜やシャンプー、トイレットペーパー等と同じ買物籠にいれられ、バーコードで価格が確認され売却される。入手から消費までの過程が、食肉であろうが日常雑貨であろうが消費者にとって同じように扱われているのである。

筆者は、食べ物を雑貨よりも大切にするべきだといった商品の優劣化や差別化を主張するつもりはない。しかしながら、現代社会の生産と消費との関係の中での肉食はいびつであると感じることが少なくない。消費行為とは、感覚的、身体的欲求を満たすために行われる具体的な人間の行為だったはずなのに、現代社会では、消費行為はかならずしも欲求から発生しているのではなく、生産に従属しているとさえ思えてくる。需要に具体性がないのに、生産が一人歩きして経済を成り立たせているという危惧を抱いてしまうのだ。少量の生産では見合わないため、廃棄を前提とした大量生産を行うという

台湾タオの人々の肉の分配。分配される食肉の部位や量は社会関係を反映するとともに、紐帯を強化する機能をもつ（1993 年、台湾蘭嶼島）。

問題は、大量消費をめぐる経済倫理の観点で扱えばよいのだろうが、それらによって動物の生命が失われるならば、問題はより複雑であり深刻だろう。食肉の消費に必要だから営まれていた生業活動としての狩猟や家畜飼養と、幻想としての消費にあてがわれた食肉の生産とでは、生きとし生けるものへの人間の態度に大きな違いがあるだろう。アニマル・ファクトリーとよばれる集約的で効率的な食肉の大量生産のありかたに違和感を覚える人間が少なくない所以である。

グローバル時代の肉食行為の行方を考える

肉食の是非も含め、人間と動物との関係における倫理的な課題は、シンガーらの「動物解放論」を中心に欧米圏において盛んに議論されてきた（Singer 1975）。シンガーは動物が人間と同様に苦痛を感じる能力があるとしたうえで、苦痛を動物に負わせることの正当性を問いかけたのだが、動物倫理に関する議論には動物愛護に見られる感情的な理由が強く押しだされることも少なくない。また、シンガーが当初、動物の解放は女性解放のパロディに聞こえるかもしれないと嘯いたように、この種の議論は倫理原則の運用にこだわることで、現実の社会の中で考えるべき問題を見失いかねない。

一方で、先述した食肉の大量生産は結果的に環境負荷を増大させ、BSE や口蹄疫といった家畜の感染症は、それらの家畜だけでなく近縁種の動物や人間にも影響を及ぼしている。人間の肉食行為に関連した様々な出来事が人間以外の動物や環境に多大な影響を与えているのが現状なのである。また、EU や TPP に代表される地域や国家の枠組をこえたグローバル消費社会では、食肉の流通やそれらの消費の形態にこれまで以上の変化が生じていくだろう。肉食の社会的位置づけを異にする文化的、社会的集団に属する者同士が共通の経済的枠組の中に組み込まれていく過程において、地域社会の中で慣行とされていた肉食行為は制度化、標準化され、土地の人たちの歴史や社会とは無関係なものに変質していく可能性は否定できない。価値観を違える人々の間での肉食をめぐる矛盾や軋轢も生じていくだろう。家畜の苦痛をとりのぞく屠殺方法とハラールの条件とが天秤にかけられるヨーロッパの食肉加工、狩猟で得られた獣肉を交易品としていた歴史をもつ狩猟採集民が野生動物保護の政策のもとで、ブッシュミートを手にできなくなる状況はグローバル時代の肉食行為をめぐる問題群を構成する。

こうした問題意識のもとで、本研究では現実の社会で慣行されてきた肉食行為とそれに伴う諸現象について人類学をはじめとするフィールド調査の知見を具体的に扱いながら、現実感を伴う議論の場を共有したいと考えている。そのうえで、個々の事例を比較検討する視点を、倫理学や心理学、経済学や獣医学といったグローバルな課題が表出している分野の研究者に期待したい。

肉食という行為は結果的に生命を奪う行為にほかならない。しかしながら、それは長い人類史において、そして現代社会においても一定の役割を果たしてきているのも事実である。異なる倫理基準や生命観をもつ社会の間では当然のことながら、人間の動物に対する態度は異なってきた。それを一定の規準や一つの方向で統制していくのは容易ではない。大切なのは、なぜ人間が今まで肉食を続けてきたかということを中立的な立場で理解し、それを続ける意義を明確に説明するための論理を築くことであろう。この共同研究をその足がかりにしたいと願っている。

福建省客家の屠夫たちが早朝に行うブタの解体の様子。肉食行為は食べることだけではない。狩猟や家畜飼養といった肉の獲得、屠畜、流通、消費、その後の扱いにいたるすべての過程を含めた視点が必要である（2005 年、中国福建省姑田）。

【参考文献】

Binfold, L. 1981 *Bones: Ancient Men and Modern Myths*. Orland: Academic Press.

Lee, R. 1968. What Hunters Do for a living, or, How to Make Out on Scarce Resources In Richard B. Lee and Irven DeVore (eds.) *Man the Hunter*. Chicago: Aldine.

馬淵東一 1940「ブヌン族に於ける獣肉の分配と贈与」『民族学年報』第二巻（『馬淵東一著作集』第一巻 1974 社会思想社）。

シムーンズ，フレデリック 2004『肉食タブーの世界史』山内昶・他訳 法政大学出版局。

Singer, P. 1990 (1975). *Animal Liberation* AVON Books.

のばやし あつし

研究戦略センター教授。専門は人類学、民族考古学、人間と動物との関係史。主な調査地は台湾。著書に『イノシシ狩猟の民族考古学』（お茶の水書房 2008 年）共編著に『生業と生産の社会的布置』（岩田書院 2012 年）など。